

『支援』公開トークセッション

教育の中の支援、 支援の中の教育

すぎむら
なおみ

倉本
智明

司会：星加良司、土屋葉

すぎむらなおみさん

1965年うまれ。大阪教育大学教育学部卒業。博士（教育学）。

現在は高等学校の養護教員。「学校」が苦手なのに、生徒のみんなといっしょにいたくて学校はやめられない。

著書に『エッチのまわりにあるもの』（解放出版社）、

共著に養護教員のなかまたちとつくった『発達障害チェックシートできました』（生活書院）など。

倉本智明（くらもと・ともあき）さん

1963年うまれ。

大阪府立大学大学院社会福祉学研究科博士後期課程単位取得退学。

20代前半までを弱視者として過ごし現在は全盲。

ものを書いたり人前で話をしたりの仕事。

著書に『だれか、ふつうを教えてください！』（イースト・プレス）、
編著に『手招くフリーク』（生活書院）など。

「教育」とは、人を何らかの意味で「望ましい」方向へ変化させることを狙いとした営みだといえます。とりわけ、制度化された枠組みである「学校教育」は、「望ましさ」の明確な目標を定め、そこに至る有効な手段を意図的・計画的・組織的に配置することによって、「教育効果」を高めるようにデザインされています。しかし、その「望ましさ」は誰にとっての、何のためのものなのか。また、その到達度・達成度は誰が、どのようにして評価できる（すべき）ものなのか。このように細かく問いを立ててみると、「望ましさ」という目標はとたんに曖昧なもの、危ういものに見えてくるのではないのでしょうか。

ともあれ、さしあたり「教育」をそのようなものとして捉えたとすると、「教育」と「支援」とは微妙な関係にあるように思います。一方で、この2つの領域はしばしばクロスオーバーします。それは、本来「教育」が広義の「支援」抜きには考えられないものだからなのかもしれませんし、「支援」の場に「教育」的なまなざしを招きよせる不思議な磁場が働いているからなのかもしれません。他方で、両者の間には相容れない方向性の違い

があるようにも思います。それは、「支援」が対象者の生に寄り添い、いわば「併走」する営みであるのに対して、「教育」は対象者に何がしかを身に付けさせようとする「先導」的な側面を含んでいるからです。このことを踏まえたとき、〈特別「支援」「教育」〉という領域は、非常に危ういバランスの上に成り立っているものだということになるのではないのでしょうか。

まずはこうした問題意識を出発点としつつ、「集団」の中での「個別的」な配慮にはどのような困難があるのか、「特別扱いされること」と「普通であること」との関係はどうなっているのか、「教える／教えられる」関係と「支援する／支援される」関係とはどのように重なり合い、またずれているのか、といったテーマをめぐる、お2人のスピーカーに大いに語っていただきます。それを通じて、「（学校）教育」と「支援」という場の内と外に働いている様々な力と、その中で生きるという経験について、考えなければならない問題がどこにあるのかを探ってみたいと思います。

日時

7月6日(土) 午後1時～(受付開始12時30分)

会場

大阪市立東淀川区民会館 会議室2

大阪市東淀川区東淡路1-4-53 TEL:06-6379-0700

(阪急電車「淡路」駅から徒歩約700メートル。クレオ北大阪の隣の建物になります)

参加費

無料

主催

「支援」編集委員会

問い合わせ

「支援」編集委員会

(生活書院内 03-3226-1203)

アクセス地図

